

## 原著論文

### 大学図書館における「場所としての図書館」の利用実態

## An Utilization Study on “The Library as Place” in Academic Libraries

立石 亜紀子

*Akiko TATEISHI*

### *Résumé*

**Purpose:** Some librarians and researchers in the field of Library and Information Science predict that library buildings will disappear in the near future as all library materials become available on the Internet. On the other hand, there are others who are reevaluating the role of traditional libraries as a “place” for studying or reading in the Internet age. In Japan, Learning Commons has become popular as a result of the reevaluation of “the library as place”, unfortunately, however, it is insufficient to discuss the theoretical aspects of providing Learning Commons in campuses, and therefore its purpose and functionality remain unclear. Clarifying the concept of “the library as place” is considered to be a first step for solving the problem. This paper examines empirically the actual situation of library use as “place” in order to discuss this concept.

**Methods and Results:** At Yokohama National University Central Library in Japan, users’ staying place, belongings and behavior were investigated by unobtrusive observation during three days (June 23-25th, 2009). The library space was divided into 30 areas, and investigators observed library users in each area. In total, 9,610 users were investigated. The results showed that 1) the library is used as a learning space for undergraduate students, 2) the personal computers in the library are heavily used, 3) that there are various ways of using the library facilities. The observational investigation method used in this study is effective for examining effectively library use, but it can not clarify users’ cognitive aspects; these may be measured by questionnaires.

- I. 「場所としての図書館」をめぐる議論
  - A. 「場所としての図書館」とは何か
  - B. 「場所としての図書館」とインフォメーション・commons, ラーニング・commons
  - C. 調査課題の設定

---

立石亜紀子：慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻

Akiko TATEISHI: Graduate School of Library and Information Science, Keio University

e-mail: aco\_reids@z2.keio.jp

受付日：2010年8月2日 改訂稿受付日：2011年2月7日 受理日：2012年5月9日

## II. 観察による「場所としての図書館」の実態調査

- A. 「場所の利用行動」の研究
- B. 観察調査の対象と方法

## III. 観察調査の結果からみた「場所としての図書館」の利用実態

- A. 「場所としての図書館」の利用実態
- B. 観察調査の意義と限界

## I. 「場所としての図書館」をめぐる議論

### A. 「場所としての図書館」とは何か

「場所としての図書館」とは、英語の「the library as place」を翻訳した日本語であるが、「場所としての図書館とは何か」という問いに対しては様々な考え方がある。そこで本稿では、「場所としての図書館」をめぐる議論についてまず述べる。

Janet L. Balasが指摘するように<sup>1)</sup>、図書館の電算化は当初、図書館の業務のあり方を大きく革新するものとして注目された。技術の発展は図書館サービス自体をも改良し、初期には書誌情報のデータベース化という形で情報検索の革新を、やがては資料そのものの電子化による全文検索を実現させ、現在ではネットワークを介しての図書館外への電子資料の提供にまでサービスの幅を広げている。こうしたサービスは、電子図書館と呼ばれ<sup>2)</sup>、新たな図書館サービスの可能性として評価される一方、ITの進展が情報流通のあり方そのものを革新し、人々の情報アクセスの手段が変化していく中で、図書館が伝統的に果たしてきた情報媒介者としての機能に対する疑問が投げかけられるようになった。

他方、こうした流れは、従来の建物・資料・人を中心とした図書館の価値を再考する契機ともなった。この議論において中心的な役割を果たしたのがWilliam F. Birdsallの『電子図書館の神話』であった<sup>3)</sup>。Birdsallは同書の中で、「電子図書館の神話」という言葉で、新しいサービスとして定着しつつあった電子図書館に対する人々の共有概念を指し、その“電子図書館神話の検討を政治的、文化的、社会的関係へ拡大”<sup>3)</sup>[p. 214]しようと試みている。その過程で、これまでの図書

館・情報学が依拠してきたビジョンを「場所としての図書館の神話」と呼び、電子図書館と比較したとき、「場所としての図書館」とはどのような共有概念であったのかを検証している。Birdsallによる電子図書館との対比を論点とした「場所としての図書館」のあり方に関する議論は根本彰による論考が詳しく<sup>4)</sup>、「場所としての図書館」の発想の原点が整理されている点で非常に重要である。しかしBirdsallが『電子図書館の神話』を発表した当時と現在とでは「電子図書館」という言葉が指す意味は大きく異なっており、産業革命に次ぐ社会変化とも言われる情報革命によって到来した現在の情報化社会の中では、「場所としての図書館」の意味するところにも変化が訪れていると考えられる。

特に影響が大きかったのはインターネットの登場とその急進的な普及であった。インターネットを利用しての図書・雑誌・データベースの提供は、図書館利用者の情報利用環境を大きく変え、図書館にとって欠かせないサービスの一つとなった。その一方で、仮にすべての資料がオンラインでアクセスできるようになった場合、人々が図書館の建物を訪れる必要性はなくなるのではないか、という危惧を図書館員はいただくようになった。Scott Carlsonが「ひと気のない図書館」<sup>5)</sup>を発表して、大学図書館の暗澹たる未来を予測したのは2001年のことで、インターネットがかなり一般的になった頃の出来事であった。図書館の資料を含むあらゆる情報が、インターネットを通じて世界中のどこからでもアクセスできる電子的な媒体となった場合、旧来の紙媒体の資料はもはや不要となり、紙媒体の資料の倉庫である図書館もまた不要となる、といった見解を述べる研究者も現れた<sup>6)</sup>。国内の議論においても、現在のような

図書館の形は不要になるだろうという見解を述べている研究者が存在する<sup>7)</sup>。

しかし同時期に欧米では「場所としての図書館」の役割を評価し、物理的な利用を後押しする議論が高まっていた。久野和子はこの背景について、「館内のデジタルサービスを含めて、図書館という物理的な場への利用者の満足度を高めることが実際に求められた」<sup>8)</sup>ことをあげ、米国においては1990年代以降、「場所としての図書館」が大きなトピックとして話題に上り続けたことを指摘している。久野は「場所としての図書館」に関する米国での議論をまとめた論考<sup>8)</sup>の中で、オールデンバーグの提唱する「第三の場」としての視点から、「場所としての図書館」が果たす社会的な役割について言及している。

図書館が「第三の場」として機能しうるかといった議論は重要な視点であり、たとえば、2009年には、国際図書館連盟 (International Federation of Library Associations and Institutions: IFLA) のサテライト会議として、「場所と空間としての図書館 (Libraries as place and space)」が開かれている<sup>9)</sup>。この会議のテーマには、社会的な「場」と物理的な「空間」の両面から見た図書館、という意味が込められており、鍵となるテーマは「第三の場」についてで、第一の場が家、第二の場が職場、第三の場が家庭でも仕事でもない、それ以外の時間を主に過ごす場所を指しており、学習の場・社交の場・第三の場として図書館が機能するための変化の必要性を訴えている。

Karen E. Fisher らが2004年にシアトル公立図書館において実施した調査においても<sup>10)</sup>、オールデンバーグの議論に基づき、シアトル公立図書館が「第三の場」としての機能を果たしているかが検証されている。Fisher らは、図書館の「場」には、「物理的な場」、「社会的な場」、「情報の場」の3種類があると述べている。この調査は現代社会における図書館の場としての重要性を明らかにしようとする試みであり、利用者が図書館の建築・サービス・資料・図書館員・図書館を利用するという行為をどのようなものと考えているか探

ることが、「場所としての図書館」を再考する一助になることを教えてくれている。

第三の場としての図書館機能の必要性への言及は、将来的に図書館において、紙媒体を中心とする資料提供の重要性が減じていくことを念頭においた議論であり、実際にGoogleブック検索<sup>11)</sup>の登場や、これに対抗する欧州連合 (European Union: EU) のデジタル図書館プロジェクトEuropeanaの誕生<sup>12)</sup>など、書物の電子化に向けた取り組みは本格的に動き出しつつある。しかしながら紙媒体資料の電子媒体への転換は、当初予測されていたよりはゆっくりと進み、現実にはごく近い将来にすべての資料が電子化されることはない、というのが現在の一般的な見解といえよう。

また、Michael Gorman が指摘するように<sup>13)</sup>、資料の電子化が進みオンラインでのアクセスが容易になった現代社会においても、貴重書を初めとして印刷体の保持が依然として重要な意味を持つ資料は存在し、物理的な図書館がその保管場所としての役割を果たし続けることに変わりはない。Gorman は同時に、学習・研究・共同体内でのミーティング場所などの人々の居場所、電子的情報資源への公平なアクセスを提供する場所、図書館員という専門家による資料アクセスへの助言が受けられる場所、といった役割の必要性も指摘している。

ここで強調したいのは、「場所としての図書館」の議論は、従来の「紙の資料・人の居場所・図書館員の役割」としての機能が、情報技術の進展により変化しつつもその重要性が引き継がれたという視点と、資料の電子化・情報技術の進化により新たに加わった新しい役割への視点という両面に注目する必要がある点である。前述のBalas<sup>1)</sup>もまた、電子図書館と「場所としての図書館」のバランスを重視しており、将来的には物理的な図書館を訪れる必要性はなくなるのではないかという問いに対して、人々は物理的な図書館と電子図書館のそれぞれを別々に必要としているのであって、両面からのサービスが必要であると主張している。すなわち「場所としての図書館」には、

①「第三の場」と言われる社会的な役割、②伝統的な機能としての「紙の資料・人の居場所・人的サービス」提供の役割、③電子資料を中心とする新しい情報技術を用いた情報アクセス手段を提供する役割、の3つの役割があるということが出来る。本稿では、「物理的な建物」への依存度が高い、②伝統的な役割と③資料の電子化に伴う新たな役割について中心に見ていく。

まず、伝統的な役割の価値について言及しているいくつかの先行文献を確認する。Joseph C. Rizzo は、どれほどインターネットや情報機器が発達し、自宅で様々な娯楽が楽しめるようになって、人がショッピングモールや映画館に出かけるように、やはり、図書館の建物に足を運ぶものだろうと述べ、「場所としての図書館」を肯定している<sup>14)</sup>。Karen Antellらは研究者にとっての「場所としての図書館」に注目して図書館内にある教員研究室保有者にインタビューを行い、研究者にとっての「場所としての図書館」の3つのテーマを発見している<sup>15)</sup>。“教員研究室は「隔絶されたオアシス」で学術研究に必要である”、“書庫の偶然的なブラウジングが研究の本質的要素”、“学術的な早期教育は、真剣な知的作業のために図書館に行くという儀式を教え込む”という3つである。彼らは電子資源の利便性を認めながらも、依然としてブラウジングの有用性を指摘し、図書館の利用法を学び確立することが、研究者の基礎体力になると主張している。また、事務的なオフィスでもある個々の研究室とは違う、純粋に学術研究に打ち込める環境として、図書館内の教員研究室が必要とされている。

Lisa Given は、大学生の学習行動と図書館スペースの関係性を調査した<sup>16)</sup>。大学において、学生・教員・図書館員に対してインタビュー調査を実施し、大学内の物理的なスペースが学業を促進するのか、妨げになるのかを検討している。その結果、学業を促進する設備として、居心地の良い魅力的なスペース、会話と協働のいずれも可能な柔軟なスペース、また騒々しい活動も静かな活動も受け入れる図書館スペースが必要であり、キャンパス内にこうしたスペースを整備することの重

要性を指摘している。以上のように、公共図書館と大学図書館のいずれの議論においても、娯楽・研究・学習の場としての図書館の重要性が低下しているわけではなく、むしろ再評価される傾向にあることがわかる。

一方、資料の電子化に伴う新たな役割について言及する文献もある。Richard Bazillion は、電子的情報資源の登場が、施設としての図書館の終焉ではなく、新種の図書館サービスへの進歩につながっていると主張する<sup>17)</sup>。また、Dawn Littleton は医学図書館員が参照すべき Web 情報源の紹介をしているが<sup>18)</sup>、どのような情報源を重視すべきかという視点において、電子情報資源の提供という文脈の中で物理的なスペースの必要性を正当化するという課題への視点が欠かせないことを強調し、学習スペースとして24時間利用できること、電子的情報資源にユビキタスにアクセスできる環境を整えること、電子化により印刷体が減少したからこそ「人」のためのスペースが用意できるという利点などを述べた上で、図書館の物理的なスペースや、「場所としての図書館」の概念について考えるための多くの文献を紹介している。

まとめると、「場所としての図書館」とは、Rizzo や Antel, Given らが強調する、「場所の提供」を中心としたサービスや、専門家としての図書館員が提供する人的サービスの再評価とともに、Littleton が提唱するように、電子図書館が提供する資料アクセスの利便性を、電子的情報資源の提供の場という形で物理的に取り込むことで、電子図書館の登場以降に現れた新たな図書館の役割を正当化する主張といえる。本稿ではこうした議論に基づき、「場所としての図書館」について検討していく。

## B. 「場所としての図書館」とインフォメーション・commons, ラーニング・commons

北米を中心に、「場所としての図書館」への再評価が進む中、もう一つ注目すべき現象が大学図書館・研究図書館において見られるようになった。それが、「インフォメーション・commons」, 「ラーニング・commons」(以下、commons)の登

場である。

Donald Robert Beagle は、その最初の例を1980年代半ばの米国ミシガン州 Jackson Community College だと述べているが<sup>19)</sup>[p. 14]、永田治樹によれば、実際に普及し始めたのはここ10年ほどであるという<sup>20)</sup>。なお、コモンズという用語は北米を中心に利用されているもので、ヨーロッパではあまり用いられないようである。たとえば、英国の Sheffield Hallam University では、図書館とインフォメーションセンターを組織としても建物としても統合して設立した、大学の学習と教育を革新する新しい施設を「ラーニング・センター」と呼んでいる<sup>21)</sup>。さらにいえば、本稿では「インフォメーション・コモンズ」と「ラーニング・コモンズ」を、一口に「コモンズ」と略しているが、Beagle はその違いについても詳しく言及している<sup>22)</sup>。しかし、ここではその詳細な差異についての言及は避けたい。本節で述べたいことは、特に北米の大学図書館において、コモンズが必要不可欠とも言える設備になりつつあるということである。

Beagle の著書 *The Information Commons Handbook* は、コモンズの歴史や役割・実務計画について扱ったものである<sup>19)</sup>。また、2008年に出版された、Bailey と Tierney の *Transforming Library Service through Information Commons: Case Studies for the Digital Age* は、北米の20の大学図書館のインフォメーション・コモンズの事例研究で、実践的にコモンズの在り方について学べるものとなっている<sup>23)</sup>。このように、実務的なハンドブックや事例集が注目されるほど、コモンズはごく一般的な設備と考えられるようになりつつある。その背景には、学部学生を中心とした学習支援機能の充実をはかる狙いととも、インターネット環境と蔵書の2つの設備を提供することで、学習場所としての図書館の地位を再構築しようとする大学図書館の意図がみえる。つまり、大学図書館におけるコモンズの登場は「場所としての図書館」の再評価が進む流れの中に位置づけることができると言えよう。

### C. 調査課題の設定

ここまで、「場所としての図書館」の考え方や、大学図書館との関わりについて述べてきた。一般に「図書館」という言葉を聞いたとき、誰もがイメージするのは、誰でも利用できる「公共図書館」になるだろう。前述の Birdsall も、「場所としての図書館」の基盤は公共図書館であると述べている<sup>3)</sup>[p. 8]。しかし、本研究では、「大学図書館における『場所としての図書館』」について考察することを目的とする。

理由は2点ある。1点目には、これまで述べてきたように、「場所としての図書館」の議論は欧米、特に米国を中心に始まり、公共図書館が出発点となっているが、この議論の背景にある情報技術の進展や電子的情報資源の流通という側面について考えた時、電子ジャーナルやオンラインデータベースの導入といったサービスは、公共図書館よりもむしろ大学図書館においてより急激に進展している。したがって、大学図書館においても、「場所としての図書館」とは何か、という問いが必要時期に来ていると考えられるからである。

2点目には、日本の大学と大学図書館をめぐる状況が、「場所としての図書館」の議論を必要としていると考えられるためである。北米で先行して導入が進んだコモンズであるが、その設置の理念的な側面や位置づけの検討が不十分である。これは、「場所としての図書館」の概念を明示することにより、解決ができると考えられる。

先にも述べた通り、「場所としての図書館」とは、①「第三の場」と言われる社会的な役割、②伝統的な機能としての「紙の資料・人の居場所・人的サービス」提供の役割、③電子資料を中心とする新しい情報技術を用いた情報アクセス手段を提供する役割、といった3つの側面を持つが、本稿では特に「物理的な図書館」への依存度が高い後者2つの役割の部分に注目している。

「紙の資料・人の居場所・人的サービス」の提供といった伝統的な役割において、大学図書館の中では、とりわけ、「人の居場所」と「人的サービス」に関する部分が重要であると考えられる。前述のとおり、大学図書館においては電子ジャー

ナルやオンラインデータベースの導入が目覚ましく、「資料の入手のために必ずしも図書館まで行く必要がない」ということがしばしば強調される。しかし現実には、大学コミュニティに所属する学生・教員の多くは大学という場所の中で長い時間を過ごしており、学習・研究のための「居場所」を必要としている。しかし、実際に「物理的な図書館」において、どのような利用実態があるかに焦点を当てた研究は乏しい。そこで本調査では、「居場所」としての「場所としての図書館」がどのように利用されているか、その実態を明らかにすることを最初の目的とする。

もう1点調査の視点として付け加えたいのは、「場所としての図書館」の役割として最後に挙げた「電子資料を中心とする新しい情報技術を用いた情報アクセス手段を提供する役割」である。前節で述べたとおり、大学図書館においてコモンズの設置が進んでいるのは、多くの大学図書館が、意識的にかどうかは別として、この視点に着目しているためと考えられる。「物理的な図書館」の利用実態を詳細に明らかにすることによって、こうした取り組みがどう影響しているかを調査の過程で明らかにする。

大学図書館の奉仕対象者には、主に3つの層が考えられる。①大学生（学部学生・大学院生）、②教員・研究者、③その他（職員・他大学の学生・一般市民等）である。本調査では、①大学生（学部学生・大学院生）に注目して、「場所としての図書館」の実態を示す。これは大学生が大学図書館ユーザーの大多数を占めることと、大学の教育サポート機能を支援する図書館の役割が、コモンズ等の建物としての図書館という「場所」を重視したサービスを生み出してきている経緯から、大学生を中心とした利用実態を明らかにしたいためである。このため本調査では、モデルとなる大学図書館において行動を観察・分析する観察調査によって実態を探る。

## II. 観察による「場所としての図書館」の実態調査

### A. 「場所の利用行動」の研究

これまで述べてきたとおり、本稿においては「場所としての図書館」について、「施設としての図書館」、「建物としての図書館」に依拠する役割を中心に考えている。

場所を利用する利用者行動の研究には、どのようなものがあるだろうか。従来、図書館の現場でよく用いられてきたのは、質問紙調査によって来館頻度や滞在時間・利用目的などを尋ねることで、利用行動を把握しようとする手法であった。しかし、質問紙調査では、回答者が必ずしも質問の意図を理解して回答できるとは限らず、また、本当のことを回答しない可能性もある。例えば、質問紙調査において年収のような公にしにくい質問をした場合、正しい回答が得られない可能性が高くなることが指摘されている<sup>24)</sup>[p. 81.]。図書館にあてはめれば、後述するように、「待ち合わせ」「睡眠」等を来館目的とする利用者が実際に存在しているが、回答する立場からすればそのようなは答えづらく、質問紙調査では正しく回答しない恐れがあるのではないかと想像できる。利用者が図書館の中で何をしているのかを把握するには、結果が利用者の意識に左右される恐れのある質問紙調査以外の他の調査方法を検討する必要がある。

米国ではごく最近になって、こうした調査が散見されるようになった。Rachel Applegate は、図書館デザインの検討として、インディアナ大学・パデュー大学インディアナポリス校において、図書館内の書架やパソコンの置かれていないソフト・スペースの利用状況を観察した<sup>25)</sup>。Applegate の研究では、春学期と秋学期のある長期間にわたって、座席の占有率と男女の比率、およびノート PC の利用率などを調査した。Applegate は調査の結果、学習室の利用、特にグループ利用が多いことや、女性は閉鎖的なスペースよりもオープンスペースを好むこと、個人で利用する場合は学習室よりも可動式のパーティショ

ンによる個室を提供するのが好ましいこと、さらにノート PC の利用が多いため、コンセントの差し込み口を増設するなどノート PC を利用しやすくする環境整備が必要であることがわかった、と述べている。この結果は、図書館デザインを考えるという目的を達するための調査方法として質問紙調査とは違ったアプローチを用いている点が興味深く、また、説得力のある分析結果を示している。一方で、調査が1日の開館時間の中で一定の時間に限られている点や、一人一人の利用者個人の行動内容に踏み込まず、座席の占有率という大まかな指標を用いたことで、利用行動の多様性を見逃している点など不十分な部分も見られる。

Bill V. Opperman らはオハイオ州立大学の理工学図書館において、館内での資料の利用・コピーの使用・資料の貸出の割合等が減少し続ける一方で、E リザーブや電子ジャーナルなどの電子資料の利用と入館者数は上昇し続けていることを利用統計により示した<sup>26)</sup>。Opperman らは来館者の出口調査により、来館者の所属や利用目的を調査し、理工学図書館が開館時間の延長や利用しやすい学習スペースの整備、PC 関係の設備の増強などを実施したことで、理工学関係の学部以外の学生の利用が増え、結果的に入館者数の増大につながったと述べている。この調査もまた、電子資料の利用の増加が、従来言われていたように入館者数を減少させるのではなく逆に増加させている、と主張している点が非常に興味深い。出口調査は自ら「簡単な調査」と言っているように補完的に行われたもので、入館者が増加した原因を数値的に補強する根拠としてはやや弱い。

それぞれの調査は、これまであまり注目されなかった「場所の利用行動」に焦点を合わせている点が注目されるが、詳細で網羅的な調査とは言い難い。

## B. 観察調査の対象と方法

### 1. 観察調査

本調査では「場所の利用行動」の実態をできるかぎり正確に把握するため、観察調査法を用いることとした。これは、調査者が実際に図書館の各

フロアにおいて、滞在利用中の利用者の滞在場所・利用物品・利用行動などを記録し、その全体像を分析する方法である。先行研究としては、書店でのブラウジング行動を観察した調査がある<sup>27)</sup>。図書館を対象とした観察調査としては、中井孝幸ら・大前裕樹らが、公共図書館の利用者の観察調査を実施している<sup>28), 29)</sup>。これは、5つの公共図書館を対象に、調査者が20分ごとに館内を巡回し、平面図に来館者の滞り場所を書き取り、さらに、推定属性・姿勢・行為内容を記していくものである。中井らはこの研究から、滞在場所と行為の関連、属性と場所の使い分けの関連が強いことを明らかにし、利用者の属性・行動・居場所の選択パターンを考慮することで、図書館の空間構成を再考することを提案している。この調査では質問紙調査も併用しているものの、観察調査を組み合わせている点でより利用者行動の実態に迫っているといえるが、利用行為パターンと滞在場所のパターンを探ることが目的であるため、行為内容の記録がかなり単純化されていて、各利用者の複雑かつ多様な利用行動には注目していない。

岸場正時らも公共図書館を対象に、来館者が最初の書架にたどり着くまでの動線を追跡調査している<sup>30)</sup>。この調査でも利用者の行為内容・姿勢・性別・年齢(推測による)などが記録されているが、調査目的は、配架方法と動線の関係を導き出すもので、利用者の利用行為の調査はあくまで付随的なものに留まっている。

吉田圭一らもまた公共図書館において、利用状況の観察調査を実施している<sup>31)</sup>。これは、1時間ごとに平面図上に利用者の滞在分布状況を記録していくもので、時間ごとの変化や行為内容の特徴も示されている。しかし、中井・大前らの調査同様、行為内容の記録は単純化されている。

以上は公共図書館を対象とした行動調査の先行研究であるが、大学図書館を対象とした調査には富江伸治らによる利用状況調査がある<sup>32)~38)</sup>。この調査は、入館者数調査、質問紙調査、座席の占有率調査を組み合わせたものである。富江らは、異なる分野の学部構成である4大学の図書館での

大学図書館における「場所としての図書館」の利用実態

結果を比較することにより、学部の差異がもたらす利用行動への影響を指摘し、その一方で、4大学の調査対象者を身分別にまとめることで、利用者身分による利用状況の違いにも言及している。特に利用スペースの調査により、図書館のスペースの配置や規模の計画に役立てることができると提言している点が、本調査の目的から見ても参考になる。

以上を踏まえて本調査では、先行研究の手法を踏襲しつつも、さらに詳細かつ網羅的に図書館内での利用行動を調査することとした。具体的には、調査期間中の開館から閉館までのすべての時間帯を網羅した、利用者ひとりひとりの利用場所・利用物品・行動を観察によって調査する、より詳細な「場所の利用行動調査」を実施し、大学生にとっての「場所としての図書館」の利用の実態を明らかにする。

本調査では、この方法で「場所としての図書館」の大学図書館における利用実態を明らかにすると同時に、観察調査を大学図書館の利用者研究において用いることの是非や今後の可能性についても考察する。以下、調査方法について詳述する。

2. 調査対象

調査対象は国立大学法人横浜国立大学附属図書館の3館ある図書館の一つ、中央図書館とした。横浜国立大学は1949年に開学した4学部4大学院を持つ中規模国立大学で、奉仕対象者数は約12,000人(2009年現在)<sup>39)</sup>である。附属図書館は大学創設と同時に開館し、2001～2002年に改修・増築工事後、2003年に再開館した。その際、滞在型図書館としての機能を先進的に取り入れてきた実績がある。滞在型図書館とは、植松貞夫によれば、開架式で貸出サービスを中心とした「貸出型図書館」と対比して、“そこを訪れること”が目的であり、“そこで読書をしたり他の図書館サービスを楽しみ、長時間を館内で過ごすことができる”タイプの図書館を指す<sup>40)</sup>。観察調査について詳述する前に、中央図書館の構成と特徴的な機能について、滞在型図書館としての機能に注

		4F	雑誌閲覧フロア
	図書閲覧フロア AVエリア PCプラザ ワーキングスタジオ	3F	雑誌閲覧フロア 会議室 新着雑誌コーナー ワーキングスタジオ
2Fメインエントランス	リフレッシュルーム 参考図書コーナー PCプラザ メインカウンター	2F	特別図書コーナー 参考図書コーナー ワーキングスタジオ
1Fエントランス	メディアホール メディアブース カフェ 情報ラウンジ	1F	書庫(開架・閉架)
		地下	書庫(開架)

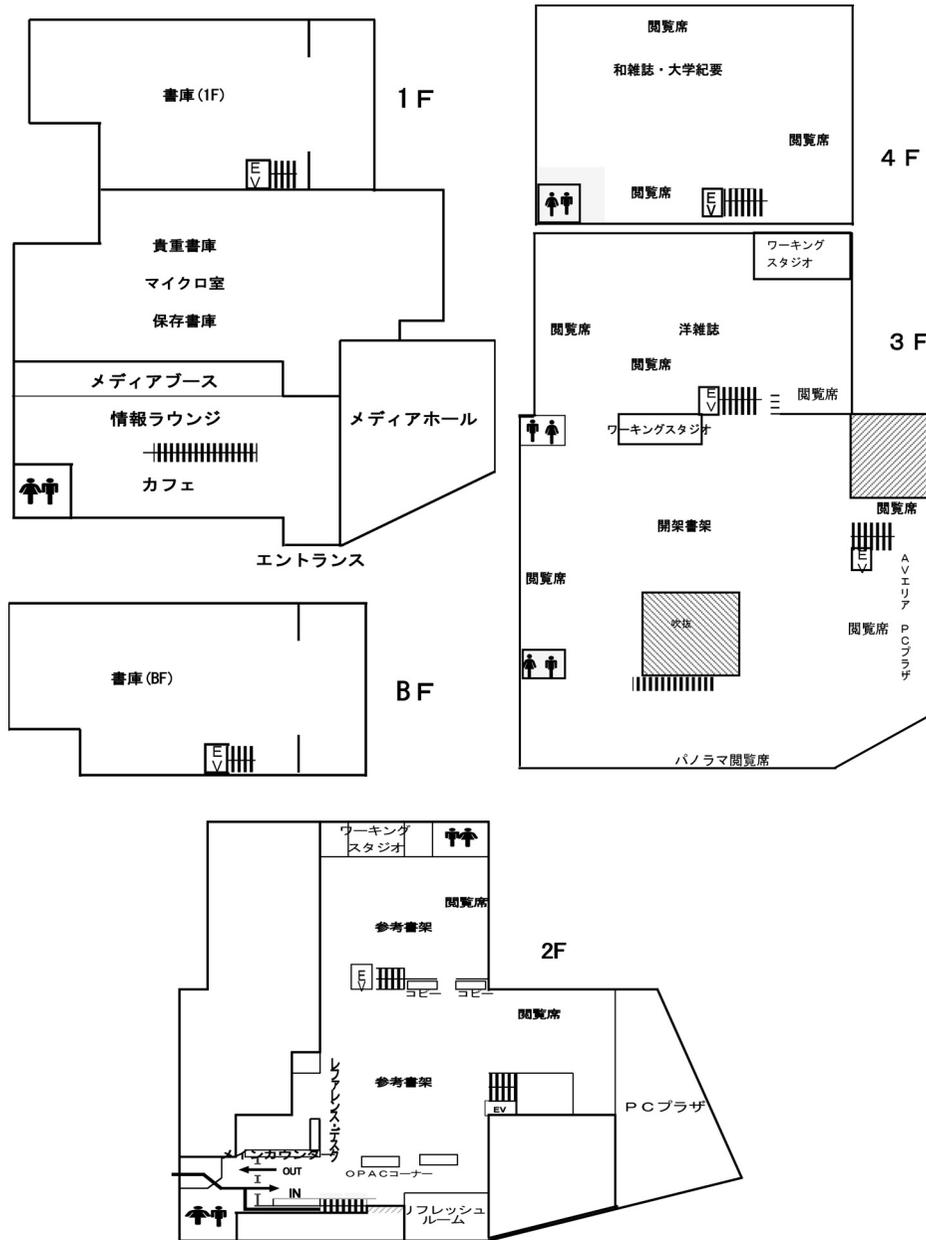
第1図 横浜国立大学中央図書館全館案内図  
 出典：国立大学法人横浜国立大学附属図書館「図書館利用案内」2005<sup>41)</sup>を元に作成

目しながら第1図全館案内図および、第2図各階案内図に沿って紹介し、対象館の選択理由について述べる。

中央図書館は地上4階・地下1階の5つのフロアから構成される、収容可能冊数885,175冊、床面積が12,231平方メートルの建物である。総床面積の41.5%にあたる5,075平方メートルを閲覧スペースにあてており、閲覧席数は1,120席となっている<sup>42)</sup>。

起伏に富んだ地形に立地するため、1階と2階のそれぞれにエントランスが用意されている。1階エントランスから中に入ると、すぐ左手には飲料と軽食の取れる図書館カフェ「shoca」、右手には講演用のホールである「メディアホール」が見える。少し先へ進むと「情報ラウンジ」があり、ここは、卒業製作展示や学園祭・就職支援セミナーなど様々な用途で利用できる多機能スペースとなっている。展示会が行われていない時は、カフェの延長としての飲食スペースであるとともに、自由に会話できる閲覧席でもあり、休憩場所としても使用可能なフリースペースとして利用されている。

情報ラウンジの奥にはガラス扉で仕切られた大小さまざまな大きさのグループ学習室「メディアブース」が5部屋用意されている。ここでは、授業の準備やサークルのミーティングができる。大きめのテーブル・椅子、インターネットに接続可能なPCなどの機器が備え付けられている。な



第2図 中央図書館各階案内図

出典：横浜国立大学附属図書館 OPAC 各階地図。 [http://opac.lib.ynu.ac.jp/opc/index\\_detail.html](http://opac.lib.ynu.ac.jp/opc/index_detail.html), (入手 2010-07-03)<sup>43)</sup>を元に作成

お、1階部分はすべて、無線 LAN が利用可能である。

2階エントランスから先の施設は入退館システム

ムを通過して入館する仕組みになっている。すぐに見えるのは参考図書コーナーで、厚く大きな参考文献・ブックをブラウジングしやすいよ

う、低書架が並んでいる。入退館システムのすぐ脇がメインカウンターになっているため、低書架の並ぶエリアは職員の目が行き届きやすく、エントランスから見渡す風景が開放的な雰囲気を持つという効果にもつながっている。

2階には他に、入退館システムの内側、つまり、図書館資料を持ち込めるエリアでの休憩スペースとして、「リフレッシュルーム」がある。部屋はガラス扉で仕切られており、新聞と、インターネット接続可能なPCが置かれている。ペットボトル類の持ち込みが可能で、周囲の迷惑にならない程度の会話は可とすることで、リラックスできるスペースとして活用されている。リフレッシュルーム内でも無線LANが利用可能である。

2階は情報基盤センターが管理している、インターネット接続可能なPCが51台設置された「PCプラザ」もある。ここでは印刷も可能なため、学内で最も頻繁に利用されているPC施設の一つである。なお、3階にもPCプラザを用意しているが、こちらは16台と設置台数が少ない。

2階・3階には、「ワーキングスタジオ」と名付けたグループ学習室を合計7部屋用意している。1階にある「メディアブース」同様にガラス扉で仕切られ、テーブル、椅子、PC、大型テレビ等のAV機器、ホワイトボード等の設備がある。1Fのグループ学習室との主な違いは、入館ゲート内の設備であるため、図書館資料を利用した学習が可能な点である。

3階の南側は主に日本語の図書を置いているエリアで、閲覧席数も多く、中央図書館の中でメインとなるフロアである。通常の閲覧席の他に、キャレルや持ち込みのノートPCが利用できる情報コンセントを用意した席、視聴覚資料が利用できるAVブース、無線LANが利用可能なエリアなど様々なニーズに応えた席が用意されている。さらにPC利用について付け加えておくと、情報コンセントと電源が設置されているのはこの3階南側のフロアのみで、無線LAN設備については、これまで述べたとおり、1階部分、2階リフレッシュルーム、3階南側フロアの3ヶ所のみであるが、持ち込みのノートPCの利用は全館どの

フロアにおいても制限はなく、自由に使用可能となっている。

3階北側と4階は雑誌フロアで、和洋の新作雑誌およびバックナンバーを配架している。1階から3階に比べると静かで落ち着いたスペースになっている。

さらに、北側の1階および地階は書庫となっている。書庫は入口が一個所であるが、開架式で、入館者が誰でも接架して直接資料に触れられるようになっている。

全体として、“多様なニーズと学生のライフスタイルにあわせた空間バリエーションを計画することから、動的空間と静的空間が円滑につながり、かつ相互に干渉しないよう各フロアを構成”<sup>44)</sup>するという基本計画に沿った設計となっている。

以上が対象館の概要である。長時間滞在に向けた多機能な図書館である点が特徴であり、先に紹介した植松の定義する滞在型図書館に合致する図書館であると言える。したがって、「場所としての図書館」の物理的な側面に注目し、大学生の利用実態を明らかにする、という本稿の目的から見て、調査対象として適当であると判断した。

### 3. 調査方法

調査は2009年6月23日(火)から25日(木)の3日間、9:00から21:45までの開館時間内に実施した。6月を選択したのは、入館者数が平均的な開館日に調査を実施するため、4月5月のオリエンテーションシーズンと、7月の前期試験期間、さらに、8月からの夏季休業期間を避けたためである。また、平成20年度の中央図書館入館者数統計を調査した結果、月曜日はやや入館者数が多く、金曜日は少ないことが分かったため、火曜日から木曜日を選択した。

調査にあたっては、中央図書館の各フロアを設備・機能により30のエリアに細分化した。30のエリアを5人の調査者が分担して受け持ち、それぞれのエリアにおいて、開館30分後から1時間おきに、利用者がどこで何を使ってどのような行動をしていたかを記録した。エリアと調査者の担

第1表 観察調査の対象エリアと担当分け

担当	エリア名
担当① 1F/2F	1F カフェ
	1F 情報ラウンジ
	1F メディアブース
	2F カウンターエリア
	2F OPAC コーナー
	2F リフレッシュ・ルーム
	2F コピーコーナー
	2F ワーキングスタジオ
担当② 2F	2F 書架エリア
	2F PC プラザ
	2F 閲覧席 A 2F 閲覧席 B
担当③ BF/1F, 3F/4F	BF/1F 書庫
	4F 閲覧席 A
	4F 閲覧席 B
	4F 閲覧席 C
	4F 雑誌書架エリア
	3F 雑誌閲覧席 A
	3F 雑誌閲覧席 B
	3F 雑誌閲覧席 C
	3F ワーキングスタジオ (雑誌フロア側)
	3F 雑誌書架エリア
担当④ 3F (1)	3F 図書閲覧席 A
	3F 図書閲覧席 B+パノラマ閲覧席
担当⑤ 3F (2)	3F AV エリア
	3F PC プラザ
	3F 図書閲覧席 C
	3F 閲覧席 D& 携帯電話コーナー
	3F ワーキングスタジオ 3F 書架エリア

当分けは第1表の通りである。

調査票にはあらかじめ想定される行動や利用物品を設定し、該当するものにチェック（複数チェックあり）を入れていく方式とした。チェック項目は事前のテスト調査により観察された場所・利用物品・行動を元に設定した。主だった利用場所・利用物品・行動内容の例を以下にあげ

る。

- 1 利用場所  
(ア) 座席 (イ) 空席 (ウ) 書架
- 2 利用物品  
(ア) PC (備え付け) (イ) PC (持ち込み)  
(ウ) 図書館の資料 (エ) 飲食品
- 3 行動内容  
(ア) 勉強している (イ) 本を読んでいる  
(ウ) PC でレポート作成  
(エ) 話し合い・雑談

先に述べた通り、一人の観察対象者に対して「複数チェックあり」としたため、例えば「座席で」「持ち込みのPC」と「図書館の資料」を用いて「勉強している」利用者がいれば、上記でいえば1 (ア)、2 (イ)、2 (ウ)、3 (ア) の4つのチェックを記入することになる。調査票は、「場所」「利用している物」「行動内容」の各小項目を各利用者別にチェックしていく方式とした。調査票内にはない行動については、裏面などに記入してもらった。裏面に記載するかどうかは調査者本人の判断で決定しているため、調査終了後の集計にあたって、裏面記載事項を調査票内のいずれかの項目に含めるか、新しく項目を設定するかについては、裏面記載事項内容を見て、筆者が判断した。調査票の記入例を第3図に示す。

各調査者が観察した結果を調査票のどの行動と結びつけるか、その判断基準について説明する。上記に例として挙げた「勉強している」と「本を読んでいる」という行動内容は、事前のテスト調査で実際に観察されたものである。両者の区別については、机に向かってノート類を広げ、書き物をしたりしている様子を「勉強している」とし、本だけを広げている状態を「本を読んでいる」と判断した。これらの判断について、複数名で実施したテスト調査の際に判断に迷うといった指摘が出ることはなく、十分に基準をそろえて記述できると判断できた。また、外から見える姿勢を頼りとして「勉強」と「読書」を分けるという判断は、先行研究においても実施されている<sup>29)30)</sup>。なお、「勉強している」という行動は、たとえばそれが試験勉強なのか、論文執筆のための研究な



ての解説を細かく行うことで、調査者ごとの記録の結果に著しい差異が出ないように留意した。

先に述べたように、本調査では、調査者が個々の利用者を実際に観察する。このため、利用者が観察中の調査者に気づいて不審を抱かないよう、調査者はフロアに出る際には図書館名の入った腕章と名札をして、利用者からみて図書館の関係者であることが分かるように注意した。

### III. 観察調査の結果からみた 「場所としての図書館」の利用実態

#### A. 「場所としての図書館」の利用実態

##### 1. 調査結果の概要

調査は1日12回、3日間で合計36回実施し、観察された延べ人数は9,610人となった。なお調査日3日間の平均入館者数は2,893人で、2009年6月の平日平均入館者数は3,149人だった。したがって、第II章B節3項で述べた、「入館者数が平均的な開館日に調査を実施する」という目的について、入館者数においては目的にかなう日程で調査を実施できた。

なお繰り返し述べている通り、本調査において明らかにしたいのは、大学図書館利用者の中でも、大学生（学部生・大学院生）の利用実態である。しかし、対象館の利用者には教職員や学外利用者も含まれ、これらを観察から見分けることは難しい。そこで調査を実施した3日間の入館者の中で、入館ゲートを通じた利用者の内訳をみることで、第2表に示した。本調査は入館ゲート外の図書館内設備も調査対象として含んでいるため、調査対象者と入館ゲート通過者は全く同等とは言えないが、観察対象者の内訳の傾向を判断す

第2表 調査日3日間の入館ゲート通過者内訳

【単位：人】

	大学生	その他	合計	大学生の比率
6/23	1,944	58	2,002	97.1%
6/24	1,875	35	1,910	98.2%
6/25	1,841	56	1,897	97.0%
合計	5,660	149	5,809	97.4%

るには、入館ゲート通過者の内訳を確認することで十分であると考えた。その結果第2表の通り、入館ゲート通過者全体の97.4%が大学生（学部生・大学院生）であったため、本調査の結果を大学生の観察調査結果ととらえることに支障はないと判断した。

第3表は、3日間合計の観察人数について、調査時間ごとの人数を時間軸にそって並べたものである。滞在人数が多い時間帯は12時半から17時半までの午後から夕方にかけてで、ほぼ1,000人前後で推移しているのがわかる。

利用行動について、多い順に並べたものが第4表である。行動の観察カウント人数は11,987人で、1人当たり1.24個の行動数が観察された。もっとも多いのは「1 勉強している」で全体の半数近く（4,369人/45.5%）を占めている。次は「2 飲食」（1,226人/12.8%）である。3番目は「3 話し合い・雑談」（1,131人/11.8%）で、図書館におけるグループ利用行動が1割以上を占めていた。

本調査では、図書館内に滞在する利用者が何を使っているかという点も調査した。第5表は、「勉強している」という利用行動の利用者に限り、使用物品の内容を多い順に並べたものであ

第3表 時間帯別観察人数

【単位：人】

調査時間	人数	比率
9:30	255	2.7%
10:30	606	6.3%
11:30	668	7.0%
12:30	948	9.9%
13:30	1,066	11.1%
14:30	1,008	10.5%
15:30	1,075	11.2%
16:30	1,105	11.5%
17:30	1,013	10.5%
18:30	823	8.6%
19:30	580	6.0%
20:30	463	4.8%
合計	9,610	100.0%

大学図書館における「場所としての図書館」の利用実態

第4表 行動内容別観察人数

【単位：人】

行動内容	人数	比率 <sup>1</sup>
1 勉強している	4,369	45.5%
2 飲食	1,226	12.8%
3 話し合い・雑談	1,131	11.8%
4 インターネット/メール	945	9.8%
5 PCでレポートなど作成	818	8.5%
6 PC・携帯利用(詳細不明)	658	6.8%
7 本を読んでいる	634	6.6%
8 寝ている	410	4.3%
9 本を探している(書架で)	405	4.2%
10 貸出・返却	174	1.8%
11 順番待ち	172	1.8%
12 OPAC検索	160	1.7%
13 プリントアウト	140	1.5%
14 コピー	138	1.4%
15 新聞を読んでいる	99	1.0%
16 雑誌を読んでいる	85	0.9%
17 展示・イベントの見学	81	0.8%
18 視聴覚資料の利用	51	0.5%
19 待ち合わせ・時間つぶし	44	0.5%
20 カウンターで相談	36	0.4%
21 音楽を聴いている	36	0.4%
22 雑誌を探している(書架で)	28	0.3%
23 イベント準備・受付・片付け	24	0.2%
24 機器類の充電	21	0.2%
25 工作	16	0.2%
26 その他	13	0.1%
27 PCゲームをしている	12	0.1%
28 何か書いている(勉強以外)	8	0.1%
29 コピーの整理	7	0.1%
30 パンフレットを読んでいる	6	0.1%
31 特別室の貸出手続き	6	0.1%
32 カフェカウンターで注文	6	0.1%
33 AVリストを見ている	5	0.1%
34 AV貸出・返却	5	0.1%
35 資料作成	5	0.1%
36 インタビュー・取材	4	0.0%
37 電話で話している	4	0.0%
38 化粧をしている	3	0.0%
39 映像を見ている	2	0.0%
合計	11,987	—

<sup>1</sup>比率はそれぞれの人数を、延べ観察人数(9,610人)で割った数。

第5表 学習者の使用物品

【単位：人】

使用物品	観察回数	比率 <sup>1</sup>
飲み物	835	19.1%
持ち込み資料	553	12.7%
PC(備え付け)	531	12.2%
ヘッドフォン or イヤフォン	524	12.0%
図書館の資料	450	10.3%
プリント・ノート	222	5.1%
電子辞書	215	4.9%
携帯電話	158	3.6%
PC(持ち込み)	129	3.0%
電卓	51	1.2%
食べ物	30	0.7%
工作用品(紙コップ・折り紙等)	7	0.2%
携帯ゲーム機(PSP/DS)	1	0.0%
カメラ	1	0.0%
合計	3,707	—

<sup>1</sup>比率はそれぞれの人数を、利用行動「勉強している」の観察人数(4,369人)で割った数。

る。使用物品の調査にあたっては、目視で確認できるものはすべて記録するものとしたが、判断がつかないものについては記録の対象にしなかったため、完全な調査ではない。例えば、観察対象の利用者が持っている本が図書館の蔵書か私物かという点の判断は、図書館の蔵書特有の装備(図書IDラベル・背ラベル・天地に押印する蔵書印)によって実施したため、角度によっては見えづらく判断できない場合もあった。確認できなかった割合がどの程度かについて、本調査からは明確な答えを出すことはできないが、事前のテスト調査における調査者の意見聴取から、結果に著しい偏向を伴うほどの見落としが生じる恐れはなく、影響はさほど大きくないものと考えている。

すでに述べた通り飲食物の携帯はかなり多い(835人/19.1%)。つづいて持ち込み資料の利用が553人(12.7%)、備え付けPCの利用が531人(12.2%)、ヘッドフォンまたはイヤフォンの利用者が524人(12.0%)、図書館の資料の利用者が450人(10.3%)といった順番であった。

以上が調査結果の概要である。つづいて、「場所としての図書館利用」の観点から、特徴的な傾向を見ていく。

## 2. 滞り場所から見る長時間利用の傾向

第6表には、エリア別の滞在人数を多い順に並べた。しかし、エリアは30に分かれているので、これだけでは傾向がわかりづらい。そこで、それ

第6表 エリア別観察人数

エリア名	【単位：人】	
	人数	比率
2F PC ブラザ	1,993	20.7%
1F カフェ	858	8.9%
3F 図書閲覧席 A	781	8.1%
1F 情報ラウンジ	772	8.0%
3F 図書閲覧席 B+パノラマ閲覧席	588	6.1%
2F 閲覧席 A	505	5.3%
3F 図書閲覧席 D & 携帯電話コーナー	472	4.9%
4F 閲覧席 C	405	4.2%
2F 閲覧席 B	386	4.0%
2F リフレッシュ・ルーム	352	3.7%
3F 書架エリア	328	3.4%
3F PC ブラザ	323	3.4%
3F 雑誌閲覧席 C	259	2.7%
2F カウンターエリア	229	2.4%
3F 図書閲覧席 C	195	2.0%
2F 書架エリア	184	1.9%
4F 閲覧席 B	182	1.9%
4F 閲覧席 A	153	1.6%
2F コピーコーナー	137	1.4%
2F OPAC コーナー	106	1.1%
3F 雑誌閲覧席 B	83	0.9%
2F ワーキングスタジオ	66	0.7%
1F メディアブース	60	0.6%
3F 雑誌閲覧席 A	42	0.4%
3F AV エリア	41	0.4%
BF/1F 書庫	35	0.4%
3F ワーキングスタジオ (雑誌フロア側)	23	0.2%
3F ワーキングスタジオ (図書フロア側)	22	0.2%
3F 雑誌書架エリア	16	0.2%
4F 雑誌書架エリア	14	0.1%
合計	9,610	100.0%

ぞれのエリアが主にどのような目的で使われるかに注目して、次の6つのスペースのいずれかに分類した。エリアとスペースの対応表が第7表である。

- ① 閲覧スペース
- ② PC/インターネットスペース
- ③ 書架スペース

第7表 エリア名とスペース名の対応表

エリア名	スペース名
1F カフェ	リラクセスペース
1F 情報ラウンジ	リラクセスペース
1F メディアブース	グループ学習スペース
BF/1F 書庫	書架スペース
2F カウンターエリア	その他
2F OPAC コーナー	PC/インターネットスペース
2F リフレッシュ・ルーム	リラクセスペース
2F コピーコーナー	その他
2F ワーキングスタジオ	グループ学習スペース
2F 書架エリア	書架スペース
2F PC ブラザ	PC/インターネットスペース
2F 閲覧席 A	閲覧スペース
2F 閲覧席 B	閲覧スペース
3F 雑誌閲覧席 A	閲覧スペース
3F 雑誌閲覧席 B	閲覧スペース
3F 雑誌閲覧席 C	閲覧スペース
3F ワーキングスタジオ (雑誌フロア側)	グループ学習スペース
3F 雑誌書架エリア	書架スペース
3F 図書閲覧席 A	閲覧スペース
3F 図書閲覧席 B+パノラマ閲覧席	閲覧スペース
3F AV エリア	その他
3F PC ブラザ	PC/インターネットスペース
3F 図書閲覧席 C	閲覧スペース
3F 図書閲覧席 D & 携帯電話コーナー	閲覧スペース
3F ワーキングスタジオ (図書フロア側)	グループ学習スペース
3F 図書書架エリア	書架スペース
4F 閲覧席 A	閲覧スペース
4F 閲覧席 B	閲覧スペース
4F 閲覧席 C	閲覧スペース
4F 雑誌書架エリア	書架スペース

大学図書館における「場所としての図書館」の利用実態

- ④グループ学習スペース
- ⑤リラククススペース
- ⑥その他

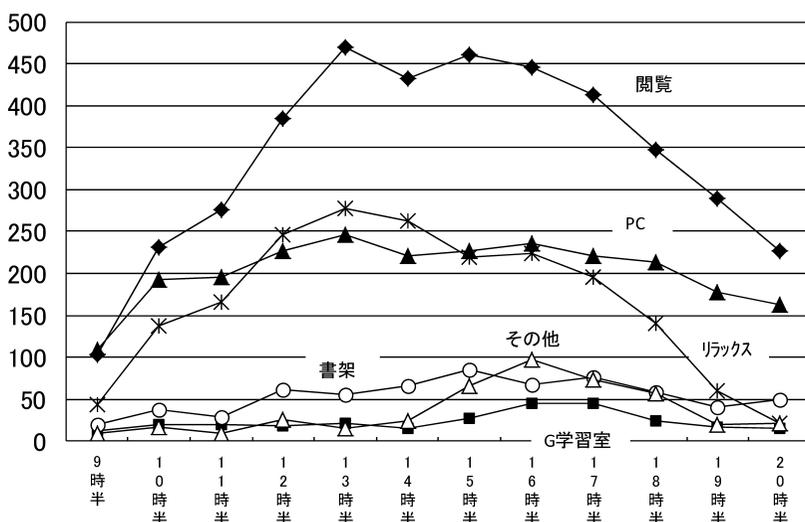
この分類に従って、各スペースの滞在人数を多い順に並べたのが第8表である。第6表を見ると、最も人数が多いのはPCプラザ、つづいてカフェ、3番目でようやく閲覧席が登場し、4番目にラウンジとなっていて、一見して図書館の伝統的な設備である書架・閲覧席などはあまり利用されていないように見える。しかし、第8表に示した通り機能別に分類したスペースごとの滞在人数を集計しなおすと、約4割（42.2%）の利用者が閲覧スペースに滞在していて、つづいてPC/イ

ンターネットスペースの人数が多く、やはり閲覧席またはPCの前での学習行動が利用の中心を占めていることを確認できた。閲覧スペースの滞在人数が最も多い一方、PC/インターネットスペースやリラククススペースの利用者もかなり多かった。書架スペースやカウンタースペースなどのその他のスペースの滞在者は、全体の1割程度であった。一方、閲覧席やリラククススペースの滞在者は、6割を超えていた。

第4図は、スペースごとの滞在人数の時間による変化を示したものである。この図からは、第3表で示した通り、滞在人数が多いのは12時半から17時半頃であることがわかるが、同時に、スペースごとにピーク時にはずれがあることもわかる。たとえば、閲覧席は13時半から15時半頃がピークとなっているが、書架スペースやその他では、15時半から17時半頃の滞在人数が最も多い。ここからは、次のようなことが推論される。学生は、授業の合間の時間帯には、閲覧席利用という行動を選択し、授業の後には、目的の本を書架から探し出して借り出すだけの行動をとる。そのために、ピークの時間に差が出ているのかもしれない。

第8表 スペース別観察人数  
【単位：人】

スペース名	人数	比率
閲覧スペース	4,051	42.2%
PC/インターネットスペース	2,422	25.2%
リラククススペース	1,982	20.6%
書架スペース	577	6.0%
その他	407	4.2%
グループ学習スペース	171	1.8%
合計	9,610	100.0%



第4図 スペースの観察人数の時間推移

### 3. 図書館における「学習のための利用」行動の特徴

第4表で見たとおり、もっとも多い利用行動は「1 勉強している」で全体の半数近く（4,369人/45.5%）を占めている。したがって、大学図書館における物理的利用の中心は「学習のための場所」ということができる。そこで、「勉強している」利用者についてさらに、個人で学習しているか、グループ学習者かに注目して分析する。

観察から個人学習者かグループ学習者かを判断するに当たっては、対象となる利用者の行動と座席の位置を基準とした。会話が可能なスペースにおいては、会話や相談があるかどうか大きな判断基準となった。そうでないスペースについては、広い6人掛けの閲覧席（「2F 閲覧席 A」「2F 閲覧席 B」など）や、横に長い閲覧席（「3F 閲覧席 B」など）において、間を空けずに隣席同士や向かい合わせで着席している利用者を、知人・友人同士とみなして「グループ学習者」と判断した。閲覧席がすべて満席となる期末試験期間などには、このような基準で判断することはできない。また、実際には全く知り合いではない利用者同士が接近して着席している可能性は完全には否定できないことに留意が必要である。今回の調査期間中は閲覧席に余裕があり、利用者がある程度自由に閲覧席を選べる状態であったため、以上の基準により「個人/グループ」の判断をした。テスト調査において調査者に確認したところでも、このような判断基準で特に違和感をもたずに調査できたことがわかったため、この方法で判断して特に問題はないと考えた。

なお一般に「グループ学習」という語は、「2人以上の少人数集団で、何らかのテーマに沿って討議や意見交換を行い、その結果として学習理解を深めたり、意見をまとめたりしていく学習方法」と考えるのが妥当であろう。しかし本稿においては、「1人で学習する」とことと「2人以上で学習する」とことの違いという点にのみ注目し、「2人以上で学習する」とことはその学習の仕方にかかわらず、すべて「グループ学習」と呼ぶこととする。

勉強している利用者の中で、個人で学習している人数は3,644人、グループ学習者は725人であった。それぞれについて、スペースごとの滞在人数を示したのが第9表である。

この表が示す通り、個人学習者とグループ学習者では、利用しているスペースが明らかに異なる。個人学習者はほとんどが閲覧スペースを利用し、続いてPC/インターネットスペースを利用している。リラックススペースの滞在者も多いが、これは飲食が可能なスペースであることが影響していると考えられる。

一方、グループ学習者は、リラックススペースを最も利用している。グループ学習スペースを別途用意しているにもかかわらず、その6割以上がリラックススペースに集中している。リラックススペースでは、飲食も可能であるし、息抜きに学習内容とは無関係な雑談もできるので、こうした場所が好まれているのかもしれない。

グループ学習者についても一つ触れておきたいのは、閲覧スペースの滞在者も、全体の21.9%と決して少なくはないことである。閲覧スペースは私語・飲食ともに禁止されているスペースである。つまり、ここでグループ学習する利用者の目的は、話し合いや相談によって課題を解決することや、わからないことを誰かに尋ねながら学習することではない。互いの存在によって学習意欲を

第9表 個人/グループ別に見た滞在スペース別人数

【単位：人】

滞在場所		人数	比率
個人	閲覧スペース	2,702	74.1%
	PC/インターネットスペース	556	15.3%
	リラックススペース	369	10.1%
	書架スペース	14	0.4%
	グループ学習スペース	3	0.1%
	合計	3,644	100.0%
グループ	リラックススペース	464	64.0%
	閲覧スペース	159	21.9%
	グループ学習スペース	86	11.9%
	PC/インターネットスペース	16	2.2%
	合計	725	100.0%

大学図書館における「場所としての図書館」の利用実態

高め、モチベーションや集中力を保って学習することが目的であると考えられる。

この点は次の第10表からも確認できる。第10表は、第7表で「閲覧スペース」と分類したエリアの、個人学習者とグループ学習者それぞれの滞在人数を多い順に並べたものである。個人利用者が最も多かった「3F 閲覧席 A」というエリアは、長机タイプの閲覧席であるが、向かい合わせの席の間に仕切りがある。「3F 閲覧席 D」も同様である。「3F 閲覧席 B」は6人掛けの大きな閲覧席で、仕切りはないが、合わせて1エリアとしたパノラマ閲覧席が窓際の席で、向かい側を意識しない作りになっている。すなわち、いずれも、個人で集中して学習したい利用者を意識した閲覧席

であり、目的に沿った利用実態が伺える。

一方のグループ学習者に好まれている「2F 閲覧席 A」「2F 閲覧席 B」は、いずれも6人掛けの大机タイプの閲覧席である。2Fが参考図書コーナーとなっているため、大型の本をいくつも置くのに適した閲覧机を配置しているというのが本来の目的であるが、実際には向かい合わせで同行者が常に視界に入る状態で学習したい利用者に好まれているようである。この結果からは、一方では周囲を意識しない集中できる環境での学習を好む学生が存在し、他方では周囲の雰囲気や他者の存在を意識することで学習行動へのモチベーションを保っている学生もいる、ということがわかる。

第10表 「閲覧スペース」の個人/グループ別学習者人数

		【単位：人】	
エリア名		人数	比率
個人	3F 図書閲覧席 A	742	19.4%
	3F 図書閲覧席 B+パノラマ閲覧席	564	14.7%
	3F 図書閲覧席 D & 携帯電話コーナー	470	12.3%
	2F 閲覧席 A	424	11.1%
	4F 閲覧席 C	405	10.6%
	2F 閲覧席 B	329	8.6%
	3F 雑誌閲覧席 C	252	6.6%
	3F 図書閲覧席 C	189	4.9%
	4F 閲覧席 B	182	4.8%
	4F 閲覧席 A	151	3.9%
	3F 雑誌閲覧席 B	83	2.2%
	3F 雑誌閲覧席 A	33	0.9%
	合計	3,824	100.0%
	グループ	2F 閲覧席 A	81
2F 閲覧席 B		57	25.1%
3F 図書閲覧席 A		39	17.2%
3F 図書閲覧席 B+パノラマ閲覧席		24	10.6%
3F 雑誌閲覧席 A		9	4.0%
3F 雑誌閲覧席 C		7	3.1%
3F 図書閲覧席 C		6	2.6%
3F 図書閲覧席 D & 携帯電話コーナー		2	0.9%
4F 閲覧席 A		2	0.9%
合計		227	100.0%

## 4. 図書館における PC 利用

再び第4表に戻り、利用行動の多いものを確認していくと、4番目・5番目・6番目には、PC関係の利用行動が見られる。使用物品を集計した第5表においても、備え付けPCの利用は3番目に多く、図書館の中で、PCの提供が重要なサービスとなっていることが確認できた。

「5 PCでレポートなどを作成」していた818人について、使用物品を集計した結果が第11表である。PCは圧倒的に備え付けのもの利用が多かった。なお、第4表の利用行動、「11 順番待ち」172人のうち62人は、「PC/インターネットスペース」で観察されたものであることもわかっている。

同時に注目したいのは、「5 PCでレポートなどを作成」の818人の中で、「図書館の資料」の利用者が77人(9.4%)と、決して多いとは言えないが、一定程度観察されていることである。本調査においては、PC利用中の同時利用物品としては、持ち込み資料の利用はほとんど確認できず、図書館の資料の利用者の方が多いという結果に

第11表 「PCでレポート作成」している利用者の使用物品

使用物品	【単位：人】	
	人数	比率 <sup>1</sup>
PC (備え付け) <sup>2</sup>	718	87.8%
ヘッドフォン or イヤフォン	169	20.7%
PC (持ち込み) <sup>2</sup>	86	10.5%
図書館の資料	77	9.4%
飲み物	43	5.3%
電子辞書	14	1.7%
携帯電話	11	1.3%
電卓	2	0.2%
持ち込み資料	1	0.1%
合計	1,121	—

<sup>1</sup> 比率は延べ「PCでレポート作成」の観察人数(818人)で割った数。

<sup>2</sup> 「PCでレポート作成」が818人であるにもかかわらず、「PC(備え付け)」と「PC(持ち込み)」の合計が804人になるのは、調査者のチェック漏れ(行動内容だけにチェックを入れ、利用物品をチェックし忘れ)ではないかと考えられる。

なった。10%弱という数値をどうとらえるかは判断の分かれるところであるが、およそ10人にひとりには、単にPC設備を利用しているわけではなく、図書館資料がすぐに手に取れるという環境を利用し、そこにメリットを求めて図書館を学習場所として選んでいるということになる。今日ではPCは一般的に家庭にも普及しているし、調査対象である横浜国立大学においても、図書館以外の学内施設にもPC利用環境は用意されている。その中で、図書館でのPC利用に価値を見出すとすれば、伝統的な紙媒体の資料を利用しながらPCも利用できる、という点であろう。

## 5. 図書館利用行動の多様性

その他の行動についても一度第4表を見てみる。「7 読書」は7番目(634人/6.6%)、「9 書架で本を探している」は9番目(405人/4.2%)など、図書館の従来的な機能にかかわる行動内容は決して多くはない。物理的な場所の利用が中心になっている事実が結果から明らかになった。第4表によれば、1番目から8番目までの行動内容は、「図書館でなくてはできない」というものではない。しかし、図書館という場所が選ばれている。その理由が何なのかは、観察から測ることはできないので、他の調査方法で解明する必要がある。他方、このように多様な図書館利用行動の実態を見ることができたのは、質問紙調査ではなく観察調査を採用したことの成果である。

## 6. 使用物品から見る利用行動に付随する特性

第5表によれば、「勉強している」利用者について、図書館資料利用者と私物の持ち込み資料利用者の割合は同程度(10.3%と12.7%)であった。筆者は調査前には、図書館を勉強場所として選択する利用者の多くは、私物の資料やノート類を利用しており、図書館資料はあまり利用されていないのではないかと予測していた。公共図書館においては古くから、自習室の提供を公共図書館の本質的サービスと考えるかどうか、という議論がある<sup>45)</sup>が、大学図書館の場合は公共図書館とは事情が異なり、学習場所の提供は本質

的なサービスのひとつであるといえる。しかしそうであっても、そこに貸出・レファレンスといった他の図書館サービスとの結びつきがあるかどうかは、今後大学図書館という場所が大学内で存続するに当たり、重要な関心事である。本調査の結果は、事前の予測以上に図書館資料を利用した学習が見られ、「場所としての図書館」の物理的機能とサービスとの結びつきが実態として明らかになった。

一方、私物の資料のみを利用している学習者もまた、少なからず存在していることは無視できない。図書館資料を利用する学習者と、そうでない学習者では、同じ図書館内で「勉強している」利用者であっても、図書館を場所として選択した理由が異なるのではないかと想像される。この点について観察から判断することはできないので、違った形での説明が必要であろう。

その他に使用物品に関して特徴的なのは、ヘッドフォンまたはイヤフォンの利用者が、上位5位までに入るほど多かったということである。ヘッドフォン・イヤフォンで聞いている内容までは明らかにできなかったが、ヘッドフォン・イヤフォンの利用により周囲の雑音を遮断し、集中したいという意識の表れなのかもしれない。このことは、利用行動と滞在場所の分析結果から、最も需要が多いことがわかった「大学生は個人で集中して学習できる場所を求める」という結果を裏付けている。

## 7. 「場所としての図書館」の利用実態

以上、「場所の機能・役割」を重視した滞在型図書館における観察調査によって、「場所としての図書館」の利用実態について示した。以下、結果をまとめる。

### a. 「学習の場所」としての役割

閲覧スペースの滞在者が4割以上(42.2%)、利用行動内容が「勉強している」となっている利用者が同様に45.5%など、大学図書館の「場所としての図書館」の実態は学習場所であった。学習場所としての利用者の類型は以下の4パターンに整理できた。

- ①個人で集中して学習する利用者
- ②PCを使って学習する利用者
- ③グループで相談や雑談を交えながら学習する利用者
- ④グループで静かに学習する利用者

個人学習者は、キャレルタイプの机やヘッドフォン・イヤフォンの利用など、「集中して学習できる環境」を求めている。一方、グループ学習者は、話し合いができる場所や、大机タイプの開放的な環境を求めている。

図書館で学習する利用者は、図書館資料を利用している利用者と、そうではない利用者が同程度の割合で観察された。図書館資料へのニーズがある利用者は、「場所としての図書館」の伝統的な機能の中でも紙の資料の利用場所としての機能を、一方、図書館資料へのニーズがない利用者は、人の居場所としての機能を重視していると考えられる。しかし、居場所としての機能を他の場所ではなく図書館に求める利用者が、図書館のどのような要素から図書館を選択したかについては、本調査からは推量できない。この点については、他の方法により説明する必要がある。

### b. PC利用者の存在

PCについては、滞在場所・利用物品・利用行動のどの面からみても上位の利用実態があり、図書館においてきわめて重要なサービスであるといえる。「電子資料を中心とする新しい情報技術を用いた情報アクセス手段を提供する役割」が、図書館の中心的な役割となっていることの表れと言えよう。特に、PCと図書館資料の両者を利用した、図書館のメリットを生かしたPC利用行動があることは、「場所としての図書館」が、電子資料と紙媒体資料を結びつける場として利用されている実態を明らかにしている。

### c. 多様な利用実態

「学習場所」と「PC利用場所」という、「場所としての図書館」の2つの大きな特徴に加えて、本調査で明らかになったのは、図書館利用の多様な実態であった。飲食、雑談、居眠り、人との待ち合わせなどの行動は、従来の大学図書館の利用調査からは表面化しない実態であったと言える。

多様性を活かして、図書館に対する心理的な垣根を壊し、「場所としての図書館」が利用しやすい雰囲気を作り出すことができるなら、こうした傾向についても評価してよいのではないだろうか。

## B 観察調査の意義と限界

以上のように、大学図書館における「場所としての図書館」の実態を、観察調査法によって明らかにした。観察調査によって、質問紙調査では得られない実証的データに基づいて実態を明らかにすると同時に、大学図書館の利用者調査の新たな手法の可能性を示すことができた。一方で、観察調査では、利用者の主観的な判断や意識を計ることはできないので、質問紙調査等の他の手法と組み合わせる必要がある。

電子化により図書館の利用者が減少するのではないかと予測されている。しかし、大学図書館は大学生によって、学習やコミュニケーションなどの場所として利用され、その利用が図書館の資料や設備と結びついていた。そこにはI章で指摘した、「場所としての図書館」の伝統的な機能としての「紙の資料・人の居場所・人的サービス」提供の役割、電子資料を中心とする新しい情報技術を用いた情報アクセス手段を提供する役割、の2点を見ることができた。今後は、こうした場所として大学内の他施設ではなく、図書館が選ばれる理由について、質問紙調査等で明らかにしていくことが課題である。

## 謝 辞

本論文は慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻情報資源管理分野2009年度修士論文を加筆・修正したものです。調査にご協力いただいた横浜国立大学図書館・情報部の皆様および、論文執筆にあたってご指導頂いた慶應義塾大学文学部上田修一教授に心より感謝いたします。

## 注・引用文献

- 1) Balas, Janet L. Physical space and digital space: Librarians belong in both. *Computers in Libraries*. 2007, vol. 27, no. 5, p. 26-29.
- 2) “電子図書館”. 図書館ハンドブック. 第6版, 日本図書館協会, 2005, p. 440.
- 3) Birdsall, William F. 電子図書館の神話. 根本彰 [ほか] 訳. 勁草書房, 1996, 254p.
- 4) 根本彰. 図書館研究への儀式的アプローチ: パーゾール『電子図書館の神話』の意義. *図書館界*. 1997, vol. 48, no. 5, p. 442-452.
- 5) Carlson, Scott. The deserted library. *Chronicle of Higher Education*. 2001, vol. 48, no. 12, p. A35-A38.
- 6) Lancaster, F. Wilfrid. 紙からエレクトロニクスへ: 図書館・本の行方. 田屋裕之訳. 日外アソシエーツ, 1987, 249p.
- 7) 土屋俊. 誰も来ない図書館. 丸善ライブラリーニュース. 2008, 復刊第4号, p. 4-5.
- 8) 久野和子. 〈研究ノート〉「第三の場」としての図書館. *京大大学生涯教育学・図書館情報学研究*. 2010, vol. 9, p. 109-121.
- 9) Ojala, Marydee. Library as place and space: An IFLA satellite conference. *Information Today*. 2009, vol. 26, no. 9, p. 34-35.
- 10) Fisher, Karen E.; Saxton, Matthew L.; Edwards, Phillip M.; Ma, Jens-Eriki. “場としてのシアトル公立図書館: 中央図書館におけるスペース, コミュニティ, 情報の再概念化”. 場としての図書館: 歴史, コミュニティ, 文化. Buschman, John; Leckie, Gloria J. 編, 川崎良孝, 久野和子, 村上加代子訳. 京都大学図書館情報学研究会, 2008, p. 199-237.
- 11) Google ブック 検索. <http://books.google.co.jp/intl/ja/googlebooks/about.html>, (入手 2010-07-03).
- 12) 鈴木尊紘. CA1632 欧州連合の情報政策と欧州デジタル図書館. *カレントアウェアネス*. 2007, no. 292, p. 11-14.
- 13) Gorman, Michael. “The library as place”. *Our Enduring Values*. Gorman, Michael. *American Library Association*, 2000, p. 43-57.
- 14) Rizzo, Joseph C. Finding your place in the information age library. *New Library World*. 2002, vol. 103, no. 11/12, p. 457-466.
- 15) Antell, Karen; Engel, Debra. “刺激的なスペース, 偶然のスペース: 研究者の生活の場としての図書館”. 場としての図書館: 歴史, コミュニティ, 文化. Buschman, John; Leckie, Gloria J. 編, 川崎良孝, 久野和子, 村上加代子訳. 京都大学図書館情報学研究会, 2008, p. 241-260.
- 16) Given, Lisa. “学部生の情報行動のための舞台設定: 学術スペースに関する教員と図書館員の視座”. 場としての図書館: 歴史, コミュニティ, 文化. Buschman, John; Leckie, Gloria J. 編, 川崎良孝, 久野和子, 村上加代子訳. 京都大学図書

- 館情報学研究会, 2008, p. 261-279.
- 17) Bazillion, Richard J. Academic libraries in the digital revolution. *EDUCAUSE Quarterly*, 2001, vol. 24, no. 1, p. 51-55.
  - 18) Littleton, Dawn. Library learning space: Empirical research and perspectives. *Medical Reference Service Quarterly*. 2008, vol. 27, no. 3, p. 313-321.
  - 19) Beagle, Donald Robert. *The Information Commons Handbook*. Neal-Shuman Pub, 2006, 247p.
  - 20) 永田治樹. 大学図書館における新しい「場」: インフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズ. 名古屋大学附属図書館研究年報. 2008, vol. 7, p. 3-14.
  - 21) Bulpitt, Graham. "Inspiring learning and teaching: The integrated Learning Centre at Sheffield Hallam University". *Libraries as Places: Buildings for the 21st Century: Proceedings of the Thirteenth Seminar of IFLA's Library Buildings and Equipment Section together with IFLA's Public Libraries Section*, Paris, France, 28 July-1 August 2003. K. G. Saur, 2004, p. 65-73.
  - 22) Beagle, Donald Robert. The learning commons in historical context. 名古屋大学附属図書館研究年報. 2008, vol. 7, p. 15-24.
  - 23) Bailey, D. Russell; Tierney, Barbara Gunter. *Transforming Library Service through Information Commons: Case Studies for the Digital Age*. American Library Association, 2008, 155p.
  - 24) 谷岡一郎. データはウソをつく: 科学的な社会調査の方法. 筑摩書房, 2007, 169p.
  - 25) Applegate, Rachel. The library is for studying: Student preferences for study space. *The Journal of Academic Librarianship*. 2009, vol. 35, no. 4, p. 341-346.
  - 26) Opperman, Bill V.; Jamison, Martin. New roles for an academic library: Current measurements. *New Library World*. 2008, vol. 109, no. 11/12, p. 559-573.
  - 27) 松田千春. 情報探索におけるブラウジング行動: 図書館と書店における行動観察を基にして. *Library and Information Science*. 2003, vol. 49, p. 1-31.
  - 28) 中井孝幸, 大前裕樹, 今井正次. 5198 図書館利用者の館内行為と滞り場所からみた居場所の形成: 滞在型利用からみた公共図書館の施設計画に関する研究その1 (図書館, 建築計画 I). 学術講演梗概集. E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎. 2001, vol. 2001, p. 395-396.
  - 29) 大前裕樹, 中井孝幸, 今井正次. 5199 他者との関係に見る居場所形成の要因: 滞在型利用から見た公共図書館の施設計画に関する研究その2 (図書館, 建築計画 I). 学術講演梗概集. E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎. 2001, vol. 2001, p. 395-396.
  - 30) 岸場正時, 今井正次, 中井孝幸. 5220 図書館の配架方法と館内行動: 動線からみた図書館計画に関する研究. 学術講演梗概集. E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎. 1995, vol. 1995, p. 439-440.
  - 31) 吉田圭一, 竹宮健司, 上野淳. 5200 図書館における来館者の行動・利用特性に関する研究: 町田市立中央図書館におけるケーススタディー (図書館, 建築計画 I). 学術講演梗概集. E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎. 2001, vol. 2001, p. 399-400.
  - 32) 富江伸治, 植松貞夫, 門谷真一郎, 川島宏, 栗原嘉一郎. 大学図書館の利用状況: 1 調査委員と年間の日別入館状況. 学術講演梗概集, 計画系. 1981, vol. 56, p. 1093-1094.
  - 33) 富江伸治, 植松貞夫, 門谷真一郎, 川島宏, 栗原嘉一郎. 大学図書館の利用状況: 2 入退館・在館者の時刻変動と在館時間. 学術講演梗概集, 計画系. 1981, vol. 56, p. 1095-1096.
  - 34) 富江伸治, 植松貞夫, 門谷真一郎, 川島宏, 栗原嘉一郎. 大学図書館の利用状況: 3 利用目的と図書館サービスの利用状況. 学術講演梗概集, 計画系. 1981, vol. 56, p. 1097-1098.
  - 35) 富江伸治, 植松貞夫, 門谷真一郎, 川島宏, 栗原嘉一郎. 大学図書館の利用状況: 4 館内スペースの利用状況. 学術講演梗概集, 計画系. 1981, vol. 56, p. 1099-1100.
  - 36) 富江伸治, 植松貞夫, 門谷真一郎, 川島宏, 栗原嘉一郎. 大学図書館の利用状況: 5: 対象図書館別にみた図書館サービスの利用状況. 学術講演梗概集, 計画系. 1981, vol. 58, p. 1493-1494.
  - 37) 富江伸治, 植松貞夫, 門谷真一郎, 川島宏, 栗原嘉一郎. 大学図書館の利用状況: 6: 来館者の身分別・目的別にみた図書館サービスの利用状況. 学術講演梗概集, 計画系. 1981, vol. 58, p. 1495-1496.
  - 38) 富江伸治, 植松貞夫, 門谷真一郎, 川島宏, 栗原嘉一郎. 大学図書館の利用状況: 7: 目録の利用状況・閲覧座席着席率及び図書館利用の評価. 学術講演梗概集, 計画系. 1981, vol. 58, p. 1497-1498.
  - 39) 国立大学法人横浜国立大学. 横浜国立大学/大学概要/運営組織など (学生数). 2009年5月1日. [http://www.ynu.ac.jp/about/organization/or\\_6.html](http://www.ynu.ac.jp/about/organization/or_6.html), (入手 2010-07-03).
  - 40) 植松貞夫. 特集, 「施設」の意味を問う: 滞在型図書館. 建築雑誌. 1995, vol. 110, no. 1370, p.

- 44-45.
- 41) 国立大学法人横浜国立大学附属図書館. 図書館利用案内. 2005.
- 42) 国立大学法人横浜国立大学附属図書館. “3 施設・設備 (平成 21 年 4 月 1 日現在)”. 国立大学法人横浜国立大学附属図書館概要平成 21 年度. 国立大学法人横浜国立大学附属図書館. 国立大学法人横浜国立大学附属図書館, 2009, p. 4.
- 43) 横浜国立大学附属図書館 OPAC 各階地図. [http://opac.lib.ynu.ac.jp/opc/index\\_detail.html](http://opac.lib.ynu.ac.jp/opc/index_detail.html). (入手 2010-07-03).
- 44) 勝俣好次. 新館紹介: 横浜国立大学中央図書館. 大学図書館研究. 2003, vol. 69, p. 68-78.
- 45) 小川俊彦. 特集, 戦略的 PR のすすめ: 市民社会への PR. 情報の科学と技術. 1994, vol. 44, no. 9, p. 504-510.

## 要 旨

**【目的】** 図書館の電子化, 特にインターネットの隆盛により, あらゆる資料は将来的に電子化され, 建物としての図書館はやがて不要になるという議論がある。一方で, 「場所」が象徴する伝統的な図書館の役割, 「場所としての図書館」の本質を探り, 再評価する動きもある。国内においては「場所としての図書館」への再評価が, ラーニング・コモンズの隆盛という形で広がりつつあるが, 両者は同等ではなく, 設置の理念的な側面や位置づけの検討が不十分である。これは, 「場所としての図書館」の概念を明示することにより, 解決ができると考えられるが, 日本の大学図書館において「場所としての図書館」の利用実態はどんなものか, という点に焦点を当てた研究は乏しい。本稿ではこの点について調査した。

**【方法・結果】** 日本の大学図書館における「場所としての図書館」の利用実態を把握するため, 2009 年 6 月 23 日から 25 日の 3 日間, 横浜国立大学中央図書館において, 観察調査を実施した。調査対象館を場所と目的によって 30 のエリアに分割し, 利用者の①滞在場所, ②利用物品, ③利用行動, を調査した。3 日間で延べ 9,610 人の行動を記録し, その結果, ①「学習の場所」としての役割, ② PC 利用者の存在, ③多様な利用実態, といった「場所としての図書館」の利用実態が明らかになった。また本稿では, 観察調査という手法によって, 質問紙調査では得られない実証的データに基づいて利用実態を明らかにすることで, 大学図書館の利用者調査の新たな手法の可能性を示した。一方で観察調査では, 利用者の主観的な判断や意識を計ることはできない点が課題となった。